

上水道施設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中越遺跡

長野県上伊那郡宮田村

1992

宮田村遺跡調査会

序

宮田村遺跡調査会は、昭和62年以来、土地区画整理事業が進められている西原地籍で、破壊される中越遺跡の記録保存作業を実施してきました。

事業の中で上水道にかかる工事は、水管が道路部分に施設された下水道に併設されてきたため、そのことが直接、遺跡破壊の原因となることはなかったわけですが、今回、それと別地点での工事が必要となり、別途に調査を実施したのであります。中越北線の道路部分であり、すでに破壊されてしまっていてもおかしくない状況の中で、幸いにも2軒の住居址を検出し、一定の成果を上げることができました。

調査を実施した8月下旬は残暑のきびしい日がつづいた時期でした。そのような中で現場の発掘作業にあたられた、宮田村遺跡調査会会长 友野良一先生をはじめ作業員の皆さんに御苦労に感謝申し上げ、発刊のことばといたします。

平成4年3月31日

宮田村教育委員会

教育長 林 金茂

目 次

序

例 言

I 遺跡の概観と調査の経過.....	1
1 遺跡の立地.....	1
2 調査の経過.....	3
(1) 調査の経過 (2) 調査組織	
II 遺構と遺物.....	4
1 縄文前期の遺構と遺物.....	4
○ 178号住居址	
2 縄文中期の遺構と遺物.....	5
(1) 149・150号住居址 (2) 土壙	
III 調査の成果.....	7

例 言

1. 本書は、平成3年度に実施した上水道施設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、宮田村（村長 伊藤 浩）の委託をうけた宮田村遺跡調査会（会長 友野良一）が、平成3年8月20日から23日にかけて実施した。
3. 記録図面、写真、出土遺物等の資料は宮田村教育委員会が保管している。

I 遺跡の概観と調査の経過

1 遺跡の立地

中越遺跡は、天竜川右岸に発達した太田切扇状地の北側の扇端部、扇端である天竜川河岸から約1kmの地点に位置している。この扇状地面は、小河川によって放射状に開析され、いく箇もの長峰状の台地の連なりとなっており、遺跡の位置は、大沢川と小田切川の間の台地上の、大沢川がその侵食面を明瞭にし始める地点である（図1）。

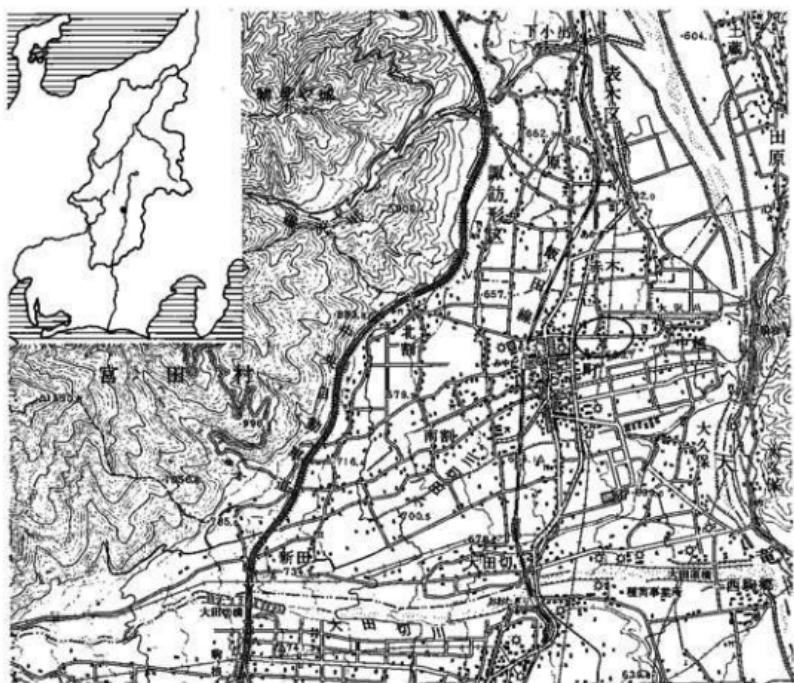


図1 位置図（5万分の1）

この大沢川と小田切川にはさまれた台地上のほぼ中央には、中越遺跡以外にも、向山遺跡（縄文早期～草創期）、姫宮遺跡（弥生後期）、田中下遺跡（奈良～平安時代）などの大遺跡が集中しており、この付近の中核都市が存在し続けた場所ということができる。

中越遺跡は、縄文前期と中期の大集落と後期の墓域とを含んでおり、台地の全面に広がっている。台地上面は、南縁に部分的に形成された低位面と、北の広い高燥面で構成されており、後者はさらに、やや低い南側と高い北側とに分けることができる。それらはいずれも東へゆるく傾斜する平坦面となっているが、今日までの発掘調査で、東流するいくつかの小規模な流れ、あるいは溝が確認されており、本来は起伏に富んだ地形であったことが想定される。遺跡地は、昭和40年代以前は一面の畠地で、しかも、古い集落である中越から見た呼称である「西原」が、一帯の字名として定着していることから、畠地であった歴史はきわめて長かったと考えられる。遺物の保存状態は決して良くはない。

遺跡付近の土中には、太田切層状地を構成する人頭大から拳大の礫が多く、所によっては集中してもおり、表土の下が礫層となっている場所もある。

調査地点は、台地中央に東西に走る中越北線の道路上の2箇所である（図2）。

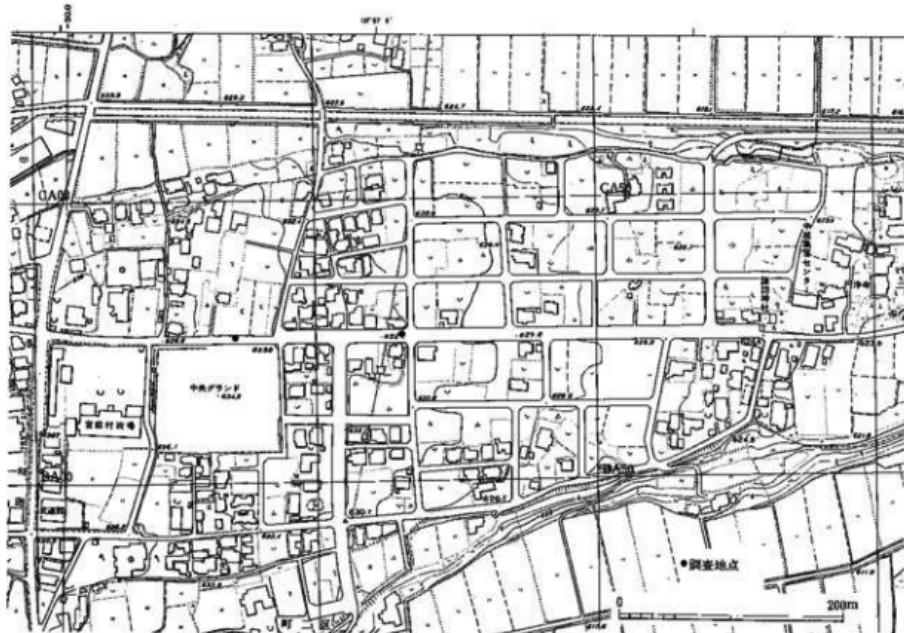


図2 調査地点図（宮田村平面図）—平成元年12月作成—をもとに作図

2 調査の経過

(1) 調査の経過

はじめに中央グランド北で15m×3mの範囲を発掘した。舗装と碎石の下は包含層まで工事によって削られていたが縄文時代の住居址1軒を検出し、引き続き1990年の西原区画整理事業に伴う第10次調査の際一部を検出した住居址の、今回の工事によって破壊されてしまう道路下の部分を調査した。昭和53年に設定した遺跡全面にわたる10mメッシュのグリッドであらわすなら、前者がBM17・18地点、後者はBM・N33地点ということになる(図3)。

調査期間は、平成3年8月20日から23日までであった。

(2) 調查組織

今回の遺跡の調査にかかる組織と、現場の発掘調査に参加され、実際の作業をしていただいた皆さんには次のとおりである。

◇官田村遺跡調査会

会長 友野 良一

委員 宮木 芳弥

11

平沢 和雄

委 貝 青木 三男

伊東 醇一

// 唐木 哲郎

教育長 林 金茂

◇官田村教育委员会

教育次長 小林 守

保長・古河原正治

係 小池 孝

◇調査参加者

小田切守正 木下道子 西村アグ子 松下末春



図3 調査区遺構全体図

II 遺構と遺物

1 縄文前期の遺構と遺物

○ 178号住居址

BM17と18グリッドの界の北隅に位置する住居址で、南のごく一部を発掘しただけである（図4）。

平面形が、円形もしくは北東方向に軸線をおく丸みをもった隅丸方形となるであろう小形の住居址で、壁は削られ、検出面から床面までは20cmほどしかない。埋土の下層に黒色土が部分的にみられた。床面にやや粘質の黄色土を貼ってあるが、壁下のわずかに浅くなる部分は軟らかく、あるいは周溝となるのかもしれない。柱穴は調査区の外となる。

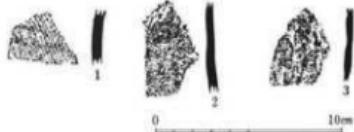


図5 178号住居址出土土器拓影

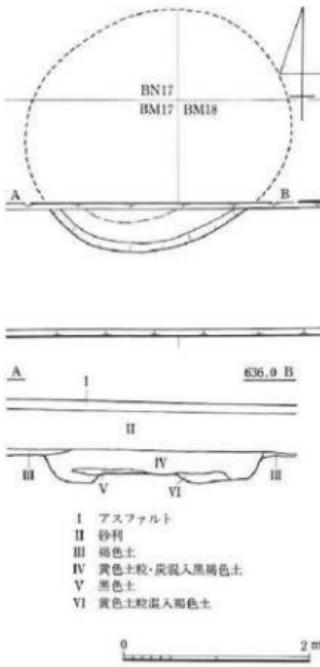


図4 178号住居址実測図



図6 178号住居址検出状況

遺物はごく少なく、15点の土器は前期初頭の斜格子目文と無文部で(図5)、他に黒曜石の剝片類が16点ある。中越期の古い住居址である。

2 繩文中期の遺構と遺物

(1) 149・150号住居址

BN33グリッドの南西隅に検出された。1990年に実施した北半分の調査によれば、150号住居址の東を149号住居址が切っている状態にあったが、今回調査した部分では、道路に関連したものであろう削平が深く、150号住居址はすでに消滅していた(図7)。また、北東の破線部分は区画整理の中で破壊されたものだが、新設した道路の隅にあたるわけで、その時点に発見するのは困難であったろう。 P_5 から炉の南にかけては電柱を立てる時に破壊されており、周溝を切るまでにはいたらなかったが、東西方向の溝状に壁と床の一部が破壊されてもいた。

以前の調査結果とあわせてみると、149号住居址の平面形は、径約3.8mの南東に軸線をおき、南東辺が強く張りだした五角形に近い円形が考えられる。今回調査した部分の壁はごく低くて数cmの埋土しか残されておらず、周溝によって住居址の範囲を確定したほどであった。その周溝は壁下をほぼ周回している。柱穴は P_1 ・ P_2 ・ P_4 ・ P_5 と調査できなかった北東壁下の1本の5本であろう。 P_4 の南に石皿が伏せて置かれているが、周溝上の深い P_7 ・ P_8 の存在とあわせると、こ

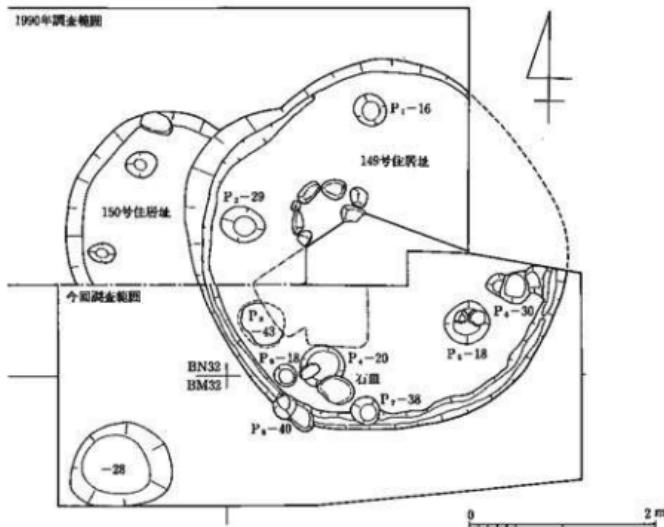


図7 149・150号住居址実測図

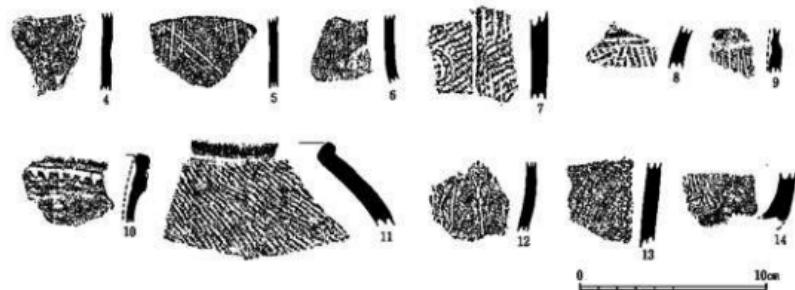


図8 149号住居址出土土器拓影

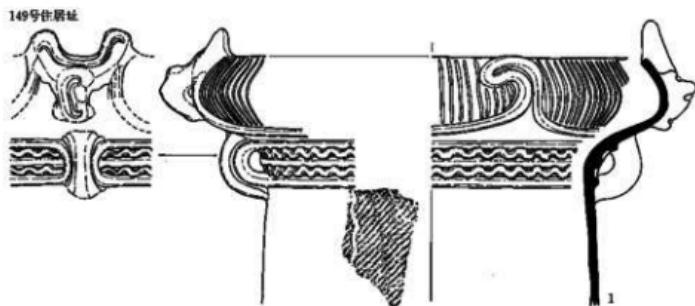


図9 149号住居址、グリッド出土土器実測図

の部分が入り口であったとも考えられよう。ただ、P₃が袋状であり、その部分を入り口とする考えも捨てきれない。P₃内の上層から、中期末第II段階の1個体の土器の口縁部10片ほど(図9-1)が、まとめられたような状態で出土した。

遺物は少ない。埋土から出土した土器(図8)には中期初頭から末葉までのものが混在している。石器には、先述した石皿のほか、部分磨製といっていい硬砂岩製の石斧が出土している(図10)以外は、黒曜石と硬砂岩の剥片類が少量あるだけである。

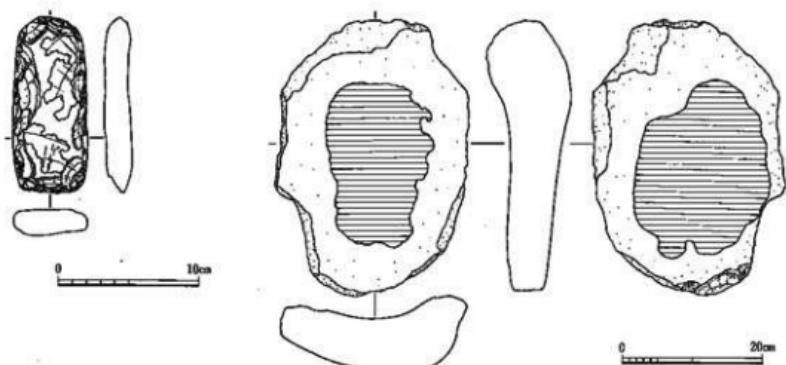


図10 149号住居址出土石器実測図

北側を調査した段階では縄文中期末葉の住居址としておいたが、P₆内の土器からそのうちの第二段階の遺構とすることができよう。

(2) 土 壤

149号住居址の南西に径1mほどの落ち込みがある。東壁上から出土した大破片の土器(図9-2)から、縄文中期初頭の土壤とした。あるいは、150号住居址と関連した遺構かもしれない。

III 調査の成果

今回の調査は、遺跡のはば中央を東西に貫く中越北線の道路上の、ごく狭い範囲で実施したもので、検出遺構も、上方がかなり削られてしまって薄い包含層しか伴わない2軒の住居址と、1基の土壤だけであった。

縄文前期の住居址は、一部が用地にかかる程度で遺構や遺物に目新しい点はないが、50cmの碎石を敷いた上に12cmのアスファルト舗装をして周囲より低めに作られた道路の下から検出されたという事実は、今後の同様な地点における調査の要否を決める上の参考となろう。

一方、以前にやり残した部分を調査した形となった縄文中期の住居址は、ピット内からの一括遺物の出土により、遺構の所属時期をより正確に決定することができた。



图11 149号住居址检出状况



图12 149号住居址P₄遗物出土状态

上水道施設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中越遺跡

平成4年3月 発行

発行 宮田村遺跡調査会

印刷 ほおづき書籍(株)

長野市中越293
